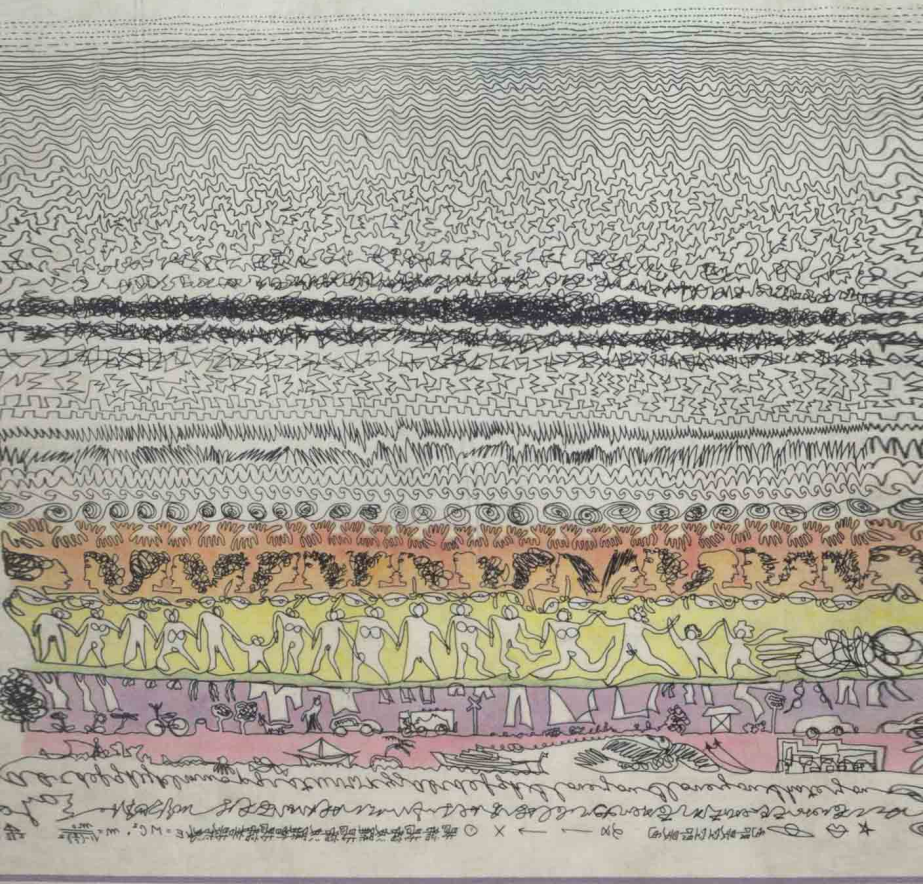


薄氷を踏む

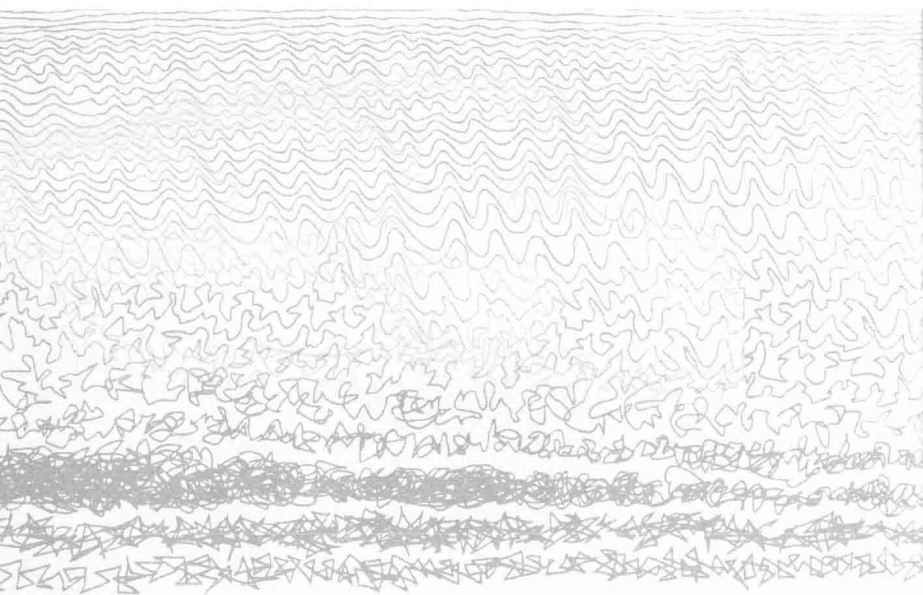
岡松和夫



新潮社版

薄氷を踏む

岡松和夫



新潮社版

薄氷を踏む

定価 一〇〇円

昭和五十七年十月五日発行
昭和五十七年十一月二十日二刷

著者 岡松和夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(03)五一一一(業務)
東京(03)五四二一(編集)
振替 東京四一八〇八二一六二
印刷 株式会社三秀舎
製本 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

薄氷を踏む	5
事件の記憶	41
冬の夜	57
旧交	79
低い足音	97
水上公園	125
海風	161
ユーカリの林	205
あとがき	231

装
画
黻
嘏

薄氷を踏む

—岡松和夫作品集

薄氷を踏む

今朝は、ゆるやかな傾斜の谷間に霧がうずくまっている。向う側の丘の斜面に建った新しい二階家も、輪郭が僅かに見分けられるだけだ。秋になると、こういう朝がときどきある。高辻宏は五時半になる頃に起きあがり、パンを口に入れ、水道の水で流しこむようにすると、六時過ぎに家を出た。勤めに行く日なら、早い時でも七時半過ぎに出ればよかったが、今日は特別の日だった。

宏は眠りの足りない、しかし、昂奮した頭のこわばりを意識しながら、玄関の差込錠の鍵を廻した。薄っぺらな鍵だが、力を入れると、ガラス戸の重なった部分が引きつけあって密着する。彼は丘の斜面を横に縫うように続いている家の前の細路に出て、急ぎ足に歩き始めた。

草原になっている空地の脇に、黒ずんだトタン屋根の小家があつて、窓にはもう明りがついている。そこで一人暮しをしている老女は、よく妻の敦子のところに遊びに来た。敦子の今入院している産婦人科医院を教えてくれたのは、その老女だった。

宏は昨日の夕方、軽く陣痛の始まった敦子連れて医院に行った。予定日を一週間ばかり過ぎていた。敦子は暫く前から蒲団に寝ているのが苦しいと云って、夜中に起きあがることもあつたから、陣痛は待ちかねていたものだった。

医者は診察室から出てくると、このまま敦子を病室に泊め、明日の朝七時から帝王切開をする
と云った。「狭骨盤だから」とも口にした。医者は初めて帝王切開の話をするくせに、当然のよ
うな顔をしていた。それが逆に不意の衝撃を急激にやわらげた。「本人は知っておりましょうか」
宏は医者に聞いた。「いや、明日話しますよ。今日話したって仕方がない」医者は落着いていた。
医者は大学病院を助教授の時に辞めて開業し、評判の医院を維持し続けている。その自信のせい
か、この医院は健康保険も使えなかった。

敦子が狭骨盤であることは、前に通っていた日赤病院でも云われた。しかし、帝王切開になる
可能性については、日赤の医師も話さなかった。深夜に出産する時には医師のいないことが多く、
その時には助産婦がとりあげると聞いて、敦子は日赤を嫌がり始めた。やはり、医者がいてくれ
なくて。その点では信頼できる個人医院の方がよいと判断して、敦子は自分から進んで今の医
院に変えたのだった。宏は、医者が話さない以上はと、昨日の夜敦子を病室に残してくる時にも、
帝王切開のことは伝えなかった。敦子は痛みが続いていたから、入院と聞いて安堵したように見
えた。その安堵は宏にも伝わって、敦子を医院に残してくることに不安はなかった。

しかし、家に戻ってから、自分の昂奮しているのが分った。無事生まれるかどうかというよう
な気懸りや、出産費用の心配といったことは頭の隅にしかなかった。帝王切開になれば保険が効
くと聞いていたが、あの医院ではもう仕方がない。そんなことよりは、ただ訳もなく昂奮してい
た。早く寝たせいか、夜中に何度も目が覚め、夢もみた。大女に敦子が両手両足を握られ、体を
空中で屈伸させられた。宏は夢のなかで茫然と眺めていた。目が覚めてから、男の昂奮はこんな
工合になるのかとも思った。

宏は車も人も殆ど見当らない大通りに出ると、停留所で市内電車の来るのを待った。両側の家は曇り空の下で、全体が灰色に見えた。霧はこの辺りにはない。宏たちの暮している場所は丘になっていて、それも浅く窪んだ谷間の斜面なので、霧が流れにくいしかなかった。やがて、元町の方からトンネルを抜けて電車が近づいて来る。市の中心部とは逆方向に向う電車だから、車内は数人の乗客しか見当らなかった。

本牧から先、市内電車の線路は根岸の広い舗装道路の中心を直線に走っている。海は暫く前まではすぐそばに電車から見えたが、今は工場地帯を造るための埋立が進んで、随分遠のいてしまった。沖からサンドポンプで吸いあげられた砂の上に、何処かの山を切り崩して運ばれてくる土が積みあげられている。まだ地ならしがされていないので、起伏の乱雑な荒れた風景を作っていた。草一つなく、風が吹けば忽ち砂埃が舞いあがった。

河を渡ったところにある八幡橋の停留所からは、宏は急ぎ足に歩いた。医院のガラス戸を押すと、もう鍵がはずしてあった。診察室のなかには人の気配がある。そこを片付けて手術室にするらしい。町医者だから、普通の診察が九時から始まる。その前に手術を済ませるつもりらしかった。昨日、医者はいとも簡単に「帝王切開は胎児を取り出すのに五分ぐらい、その後一時間足らずで終るから」と云った。

病室は畳の部屋で、普通の家の座敷や小部屋をそのまま使っている。廊下の奥の三畳間が敦子の部屋だった。襖を開けると、敦子が助けを求めるような目で、こちらを見た。しかし、強く訴えかけるようではない。苦痛がひどくなると、目が光を失って内向したような状態になる。今がそういう感じだった。

「痛くて、一晚中寝られなかった」敦子は低い声で云った。

「帝王切開だと云うことは聞いたか」

敦子は頷いた。敦子は宏が説明しなくとも、もう苦痛を逃れるために手術を待ち望んでいた。

大柄な看護婦が敦子を呼びに来た。敦子は起きあがって、看護婦に腕を支えられた。敦子は腰を曲げて手術室に歩いていった。

宏はそれを見送ると、三疊間の隅に坐りこんだ。汗くさいような妊婦の匂いが部屋に残っていた。

座敷の方に寝ている女が廊下に出て来て宏を見ながら歩いた。ネグリジェ姿だが、平然としている。それから暫くして、手術室からの声が響き始めた。「イタ、イタ、イタイヨウ、イタイ、イタイ」というように聞える。力のこもった動物的な声だった。それを敦子の声だと認めるまでに、少し時間がかかった。座敷のガラス障子が閉められた。宏は、その声を初めてではないと思つた。二年前、腎臓を悪くした時に、入院先で敦子は同じような声をあげた。あの時、検査室から出てきた敦子は指をひきつらせ「麻酔のききにくい体らしいの」と訴えた。そのことを医者に話しておけばよかったと思つたが、今更手術室のドアを押し開くこともできなかった。声は途切れ途切れになり、低くうなるように変つた。それから暫く聞えなくなった。

手術室のドアが開いて、医者の姿が見えた時、宏はすぐに立ち上つた。医者は手招きした。白衣の裾に血が大きく染み、飛沫も胸のあたりにあつた。医者は大柄な看護婦と二人だけで手術をしたらしかった。そのことに宏は驚いていた。

「女の児ですよ」医者はそう云つてから、「子宮の外側に、こんなものができていました」と、

ガーゼに包んだものを宏に見せた。宏の眼は、白っぽい塊りを見た。「筋腫です。随分大きい。これが内側にあると、いろいろと悪さをするんだが」

医者、それからすぐ手術室に戻った。筋腫を見せるためにだけ、廊下に出て来たらしかった。それから後、医者、看護婦に抱えあげられて、敦子が出て来た。眼を開いていて、宏が分るようだった。「イタイタ。注射ハマダナノ。麻酔が効イテイナイノヨ」敦子は宏に訴えかけた。宏は看護婦の顔を見た。看護婦は首を横に振った。

それでも、敦子は普通よりも余計らしい麻酔薬を要求し続け、看護婦は結局注射した。「暫く待合室に移って下さい。一人の方が落着きますから」看護婦は云った。

医者は手術室で子供を見せた。顔の赤い斑の皮膚が記憶に残った。眼が大きいように思った。「コンナニ苦シイトハ思ワナカッタ」と訴えた敦子に子供を見せてやりたかった。

「午後にも来て下さればいい。それまでは奥さんを眠らせた方がいい」医者の方は平然としていた。

宏は中途半端な気持のまま玄関で靴をはいた。外に出ると、来た時とは違って勤めに出かける何人もの人間の急ぎ足の姿があった。そのなかにまぎれるようにして歩き始めると、心が落着いてくる。敦子の苦痛も、腎臓を調べた時の方がもっとひどかったではないか。あの時は検査を担当した若い医者を信頼できないと思った。しかし、今度はそういうことはなさそうだ。

人に混って市内電車の停留所に立って見た時、家に帰っても仕方がないと思った。宏が講師をしている高等学校は、ここからなら歩いて行ける。今日の授業は休みと決めて電話をかける気だったが、こうなってみると午前中の分はできる。彼は停留所の一段高くなっているコンクリート

から離れると、学校の方に歩き始めた。授業は二時間目からだからまだかなり早い、その間は講師室で休んでいればよい。

二

敦子から妊娠のことを聞かされたのは、二月の初めだった。去年の暮、敦子は出血して、近くの産婦人科に行った。そこに何日か注射に通って出血はおさまった。女医はその時妊娠の可能性があると、ほめかしたらしい。一月の末からは、いくらか胸に不快を感じていたことも宏は知らなかった。

打明けられた時には、宏はかなり満足を感じた。敦子の表情に、今迄にない平穩のようなものがあった。ただ、右の下腹部がときどき差しこむように痛むらしいが、苦にもしていない。

「よかったじゃあないか」

敦子は素直に頷いた。

その医院は電車通りに面しているのに、待合室に人のいることは滅多にないらしかった。そういうことも、敦子は初めて宏に話した。去年の暮の出血のことは知っていたが、その外のことには強情に黙りこんで、自分独りで考えていたらしい。

一週間ばかり前も、敦子は突然家を出ると云い出し、それをどうやら鎮めたのだったから、敦子の表情のやわらぎや、宏に相談しかける言葉が、宏には突然の変化のように見えても仕方がなかった。もともとの原因は宏の方にあったが、宏は自分ではとくに始末をつけ、敦子とまともに向いあつて暮しているつもりだった。しかし、敦子には許せないらしく、不意に女の名前を口

にすることもあった。女の名前が出て来ないときも、敦子の衝動的な怒りの始まる原因は、はっきりしていた。だから、二人の結婚生活は薄氷を踏むところまで来ていたのだ。

「あなたは、普通の人と違っていているから」敦子は怒りで昂奮した時には、こんな言葉を云った。「家庭というものを真剣に考えたことがありますか」

そうなると、宏はたいてい黙った。一つには、どんなに説明しても、敦子は宏を許さなかった。その底には信頼していた人間に裏切られたという怒りが抑制を越えた激しさで存在していることが分っていた。それに、宏は実際「家庭」という言葉で何かを考えたことがなかった。敦子との関係にしても、結婚した男と女の問題として頭をめぐらしている。自分の方からは、別れたくないと思っている。しかし、暫く前からは、一緒に暮す気があるなら何時までも過去のことを持ちだしてほしくないという冷淡な気分さえ起りかけていた。

そういう宏には、思いがけない敦子の変り方だった。敦子は一週間前には家を出るなどと言ったのに、もう無事に子供を生むことしか頭にないような話し方になっていた。

「あの病院には、本気で子供を生もうと考えている人は来てないみたい」

「信用ができないんだね」

敦子は頷いた。

「第一、清潔じゃあないのよ。それに、あの女医さんはまだ独身なのかしら、妙に口紅を濃くぬって、患者の前で煙草を吸うしね」

「入院できる部屋はあるの」

「それはあるけれど、手術を受けた人がちょっと休んでいるのを見たことがあるだけ」

「手術というと、搔爬？」

「そうだと思う」

その夜、宏はいつものように夕食を済ませた後、二時間ばかり眠った。本を読むにも、真夜中の方がよく頭に入ってから、結婚してからも、学生時代から続いているこの習慣は変えなかった。六畳の部屋で宏が眠っている間、敦子はたいてい隣の三畳間でラジオの音を低く鳴らしながら過している。その日もラジオの音は聞えていたが、宏が寝間着を着替えて間仕切の襖を開いても敦子はいなかった。敦子は十一時近くによりやく帰って来た。昼間の妊娠の打明け話を聞いていなかったら、随分落着かない気持ちでいたろう。

敦子は玄関のガラス戸をそっと開けた。宏の机の置いてある三畳間は玄関からすぐだったから、靴を脱ぐ前から敦子の姿が見えた。敦子は、ちよつと舌を出して、「御免なさい」と云った。「堀切さんのところに行っていたの。すぐ帰ってくるつもりが、おそくなって」そう云いながら上機嫌そうにしていた。

「それなら、こちらが寝る前に云ってくれたらよからう」

「そうなの。ところが、あなたが眠った後に行きたくなってしまうって」

敦子は羞ずかしそうに台所に逃げて、湯をわかし始めた。黒い影が三畳間との境の障子に映った。影はじつと動かなかった。それから不意に敦子は顔を出した。生真面目な表情に変わっていた。「妊娠したことを話しに行ったの。あたし、彼女に仕事がないか頼んでいたから。今では、もしあっても断然なくてはならないでしょう」

宏は自分の顔から血の引く感じがした。こちらが我慢にも限度があると思っただけではな